

3. 2001年度人文社会科学研究所活動報告

(1) 国際シンポジウム「東北アジア歴史像の共有を求めてII」報告

人文社会科学研究所委員 松本 ますみ

2001年7月14日～15日、「東北アジア歴史像の共有を求めてII」と題する国際シンポジウムが新潟市新潟会館、敬和学園大学S31教室を会場にして開催された。

主催は、同シンポジウム実行委員会と敬和学園大学・同人文社会科学研究所であった。本学からは、松本ますみ助教授を実行委員長とし、神田より子教授、田中利幸教授、房文慧助教授、山田耕太教授（50音順）を実行委員として、3月末から、新潟大学、新潟産業大学、新潟国際情報大学、県立新潟女子短期大学、長岡大学という県内諸大学の関係教員とともに実行委員会を数回開催し、この日にこぎつけたものであった。

前年度も同じテーマで、新潟国際情報大学を会場に国際シンポジウムを開催したが、2001年度はさらにその内容を深めるものであった。このテーマを実行委員会が選定した理由は、以下のとおりである。

環日本海時代と言われて、すでに10年以上たつ。その間、自治体間の交流が対岸諸国、対岸自治体とも盛んとなってきており、人的、物的交流が目立つようになってきた。しかし、従来の環日本海研究といえば、おしなべて経済交流、経済研究が主流であった。それは、日本の経済発展の主流に乗り遅れた日本海側諸自治体はその活路を、対岸諸国に求めようとしたことが大きい。しかし、長引く不況で、その活動にも一時ほどの活気がみられない。今までの経済一本槍の交流よりは、むしろ日本と対岸諸国の人々との間の歴史認識の齟齬を解くほうが、将来におけるより一層の関係強化につながるのではないか、という意見が実行委員会で多数を占めた。そこで、将来における、共通教科書の執筆をも念頭において、このようなシンポジウムを開催することになった。

おりしも、いわゆる「つくる会教科書」による教科書問題検定通過、採択問題が浮上している時期にあたり、参加した一般市民、学生、研究者たちの注目度も高かった。

以下、そのシンポジウムの内容を報告する。



第1日（2001年7月14日） 司会：古厩忠夫（実行委員会代表・新潟大学教授）

李啓煌（韓国 仁荷大学教授）：「記憶の捏造と暗殺」

趙煥林（中国 遼寧省档案館副館長）：「中国では東北陥落期をいかに教育しているか」

歩平（中国 黒龍江省社会科学院副院長）：「21世紀に向けての中日関係と歴史認識」

ボリス・スラヴィンスキー（ロシア科学アカデミー世界経済国際関係研究所主任研究員）：「第二次大戦におけるソ連の対日参戦問題について」

サラ・ハンナシ（チュニジア共和国 駐日特命全権大使）：「閉じられた空間としての地中海——南側からの視点」

古厩忠夫「シンポジウム第1日目を終えて——司会者としてのコメント」

第2日（7月15日） 司会：松本ますみ（敬和学園大学助教授）

開会の挨拶：北垣宗治（敬和学園大学長）、石川喜一（同人文社会科学研究所長）

浅倉有子（上越教育大学助教授）：「日本と韓国の博物館展示と歴史認識」

呉文星（台湾師範大学教授）：「台湾の国民中学校教科書『認識台湾 歴史編』をめぐって」

鹿錫俊（島根県立大学助教授）：「日中関係の齟齬を招くもの——日中戦争前夜の一例：「後退」への危惧とその反動」

田中利幸（敬和学園大学教授）：「加害と被害——歴史認識の共有を求めて」

パネルディスカッション

コーディネーター：小澤治子（新潟国際情報大学教授）

特に、本学で行われた二日目では、午後、ハンナシ大使以外の発言者が勢ぞろいしてパネルディスカッションで盛んな意見交換がなされた。本シンポジウムに参加された方々は、かなりの近代史に関する知識をもっていたことがその原因としてあげられよう。

その中で、もっとも論議を呼んだのが、呉文星教授の「台湾の国民中学校教科書『認識台湾 歴史編』をめぐって」と題する報告であった。特に、中国側の研究者からの追求が激しく、冷戦が終結しても、まだ終わりのない大陸・台湾間の歴史認識の溝を垣間見たようであった。

また、浅倉氏の発表においては、博物館をどのように展示するかにおいて、各国の歴史認識が見え隠れするとの指摘があり、博物館も、イデオロギーの表象であるという意味では、国民国家の物語からは自由でないということが述べられた。

鹿錫俊氏は、日中戦争前夜における日本の政策決定者の発言、文書を丹念に負った上で、面子をかけた大陸侵略の意図が、容易な後退を不可能にしたことを証明した。

本学教授田中氏からは、最新の著作Japan's Comfort Womenの結語部分に基づき、被害者は加害者となりうるし、加害者も被害者となりうるという具体的な例をあげながら、歴史の共通性と普遍性、独自性と特異性を比較しながら、歴史研究を共同で進めなければならないとの指摘があった。

なお、シンポジウム全体の内容については、「国際シンポジウム東北アジア歴史像の共有を求めてII 報告論文集」『新潟環日本海研究ネットワーク（仮称）年報』第2号、2001年に詳しい。

本学で開催した二日目は、非常に暑い日にもかかわらず、本学学生36名をはじめ、多くの市民、研究者を集めた（トータルで180名）。

学生アルバイトを10人と実行委員の教員でなんとか、なんとか大きなシンポジウムを成

功裏に終えることができた。特に、本学学生アルバイトの態度が良好であったという感想を後でいただき、主催者としては喜びにたえない。また、事務局にはバスの運行、事務処理などでお手数をかけた。合わせて感謝する次第である。

また、大会実行委員会レベルでは、講演者の選定、外国人講師の招聘、補助金の申請、宿泊の手配と大変なご足労をおかけした。このシンポジウムの成功が研究所の次の企画への大きな自信となるものと信じる。